

OiBokkeShi

「老いと演劇」オイ・ボッケ・シ

× 三重県文化会館

「介護を楽しむ」「明るく老いる」アートプロジェクト

介護に寄り添う演技 体験講座のご案内



講師へのインタビュー、体験講座の取材など随時承っております。

お気軽に下記連絡先までお問い合わせ下さい。

三重県文化会館

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田 1234

公益財団法人三重県文化振興事業団 担当：堤 佳奈

Tel.059-233-1100 E-mail. tsutsumi@center-mie.or.jp

事業趣旨

高齢社会の現代、介護者の負担は日々大きくなり、介護疲れやストレスから心身共に病んでしまう方も少なくありません。

そんな中、近年注目を集めている一人の俳優／介護福祉士がいます。名前は菅原直樹さん。

演劇界の芥川賞ともいえる岸田國士戯曲賞の受賞作家たちの作品に多数出演し、現在も平田オリザ率いる劇団青年団に所属するプロの俳優です。彼が 2012 年東日本大震災をきっかけに岡山に移住し、介護士をしながら始めたのが、介護に演技を取り入れた活動でした。

ちょっとした演技の手法を使うことで、介護する側もされる側も、お互いがもっと楽に気持ちよく過ごせる。

私たちは、県内の様々な介護現場で菅原さんの体験講座や講演会を開催し、今後のより良い介護の在り方を皆様と共に模索していきたいと考えています。

なぜ三重県文化会館がこの事業を行うの？

一般的に、劇場は「音楽や演劇といった舞台芸術のイベントを行う場所」というイメージが強いのではないのでしょうか。

しかし、劇場の役割はそれだけではありません。貧困・障害等、様々な理由で社会的に孤立や困難を抱えている方々に対して、アートの力で問題を解決する手助けをし、豊かな生活を楽しんでいただく「社会包摂」という大切な機能があります。

三重県文化会館では、この社会包摂の一環として、2017 年度より、介護の現場に演劇の手法を取り入れた取り組みを行います。

講師プロフィール

俳優／介護福祉士 菅原直樹

OiBokkeShi 主宰。四国学院大学非常勤講師。
平田オリザ率いる劇団「青年団」に俳優として所属。前田司郎、松井周、多田淳之介、柴幸男、神里雄大など、新進気鋭の劇作家・演出家の作品に多数出演し、東京の演劇界の第一線で活躍。俳優の傍ら、2010 年より特別養護老人ホームの介護職員として働く。その中で、認知症のお年寄りを前に演技をしている自分に気付く。



考えてみれば、認知症のお年寄りは介護者からその言動を否定されてばかりいる。ぼくたちの社会で通用している価値観で接してしまうと、どうしてもボケを正してしまいがちである。(中略) 介護者に求められることは、ボケを正すことではなく、葉に頼ることでもなく、演技をすることなのではないか。相手の感情を尊重して、たとえ現実ではありえないこと、常識では間違ったことだとしても、相手のストーリーを引き受けて演じる。演技によって、認知症のお年寄りとの介護者の関係を良好に保つことができるのではないか。(中略) このようにして老人ホームで働く俳優の頭の中では、演劇と介護がどんどん結びついていった。・・・

(シアターガイド×アーティストシリーズ vol.11 より)

2012年、東日本大震災をきっかけに家族と共に岡山県に移住。2014年4月、「老人介護の現場に演劇の知恵を、演劇の現場に老人介護の深みを」という理念のもと、地元住民らと劇団「OiBokkeShi」(オイボッケシ)を結成。観客が出演者とともに認知症患者を探しながら街中を歩く「認知症徘徊演劇」等、認知症や老いをテーマにした作品の上演を定期的に行うほか、認知症ケアに演劇手法を活かした「老いと演劇のワークショップ」を全国各地で展開している。中でも看板俳優は、ワークショップで出会った90歳の「おかじい」である。

おかじいは、認知症の妻を一人で介護している“脇役俳優”だ。定年後に俳優を志し、これまでに今村昌平監督の「黒い雨」「カンゾー先生」などにエキストラとして出演している。「老いと演劇のワークショップ」には、新聞に掲載されたワークショップの告知を読み、「ボケは正さず、演技で受け止める」という見出しに共感して参加したそう。演じることが大好きなおかじいは「命のある限り演じ続けたい」と言っている。

(シアターガイド×アーティストシリーズ vol.11 より)



その活動は注目を集め、2015年には岡山放送が密着取材を行い、ドキュメンタリー番組『よみちにひはくれない“若き俳優介護士”の挑戦』が放映された。同作は、「第24回FNSドキュメンタリー大賞」で大賞に次ぐ優秀賞を受賞。2016年より、岡山県奈義町アート・デザイン・ディレクターに就任。

菅原直樹出演歴

【映画】

- ・「歓待」(2011) 監督：深田晃司 ※第23回東京国際映画祭日本映画「ある視点」部門受賞
- ・「ミツコ感覚」(2011) 監督：山内ケンジ

【舞台】

- ・青年団「バルカン動物園」「ソウル市民昭和望郷編」(2011)
作・演出：平田オリザ
- ・MITAKA"Next"Selection12th 参加作品
水素74%「謎の球体X」(2010) 作・演出：田川啓介
- ・二騎の会「四番倉庫」(2010)
作：宮森さつき 演出：多田淳之介
- ・ままごと「スイングバイ」(2010) 作・演出：柴幸男
- ・岡崎藝術座「古いクーラー」(2010) 作・演出：神里雄大



青年団「ソウル市民昭和望郷編」(2011)

- ・フェスティバル／トーキョー09 春 参加作品「火の顔」作：マリウス・フォン・マイエンブルグ 演出：松井周
- ・五反田団「生きてるものはいるか」(2007) 作・演出：前田四郎 その他多数

OiBokkeShi の活動記録

【公演】

- ・『B P S D : ぼくのパパはサムライだから』(2016) 於：旧内山下小学校
- ・『老人ハイスクール』(2015) 於：旧内山下小学校、岡山県立和気閑谷高等学校
- ・認知症徘徊演劇『よみちにひはくれない』(2015) 於：和気町駅前商店街

【ワークショップ・講演会等】

- ・2017. 2 「老いと認知症を演じて考えるワークショップ」於：RIM 福山（広島）
- ・2017. 1 シアターcommons「老いと演劇」「老いのリハーサル」ワークショップ於：港区立介護予防総合センター
- ・2016. 12 株式会社雲母書店主催 認知症ケアが変わる！「演じる力関わる力」
於：NATULUCK 日本橋、大阪府社会福祉会館
- ・2016. 11 ワークショップファシリテーター養成講座 2016 後期 キックオフ講座
『劇場のこれから 福祉現場との関わりを考える』－「老いと演劇」 OiBokkeShi の活動を参考に－
於：穂の国とよはし芸術劇場 PLAT（愛知）
- ・2016. 9 ひめじおれんじ（ひめじ認知症啓発協議会）主催
「老いと演劇～認知症の人と“いまここ”を楽しむ」ワークショップ・講演会 於：姫路市民会館（兵庫）
- ・2016. 9 アートマネジメント人材育成講座「老いと演劇のワークショップ」於：三重大学
- ・2016. 8 希望が生まれる介護セミナーin 岡山 於：西大寺ふれあいセンター
- ・2016. 7 「演劇で介護現場を楽しく豊かにする」体験講座・講演会
於：高鍋町老人福祉館・都城市総合文化ホール（宮崎）
- ・2016. 5 「老いと演劇のワークショップ」於：岡山県ホームヘルパー協議会
- ・2016. 4～ シニア世代向けの演劇講座「シバニイル」於：エンターワケ（岡山）
- ・2016. 3 「老いと演劇～認知症の人と“いまここ”を楽しむ」講演会 於：和気商工会館（岡山）
- ・2016. 3 「老いと演劇のワークショップ」於：岡輝学区カフェ（岡山）
- ・2016. 3 「老いと演劇～認知症の人と“いまここ”を楽しむ」講演会 於：枚方市デイスサービス連絡協議会
- ・2016. 2 「老いと演劇～認知症の人と“いまここ”を楽しむ」講演会 於：中国短期大学（岡山）
- ・2016. 1 笠岡市・笠岡市認知症介護研修センター主催「老いと演劇のワークショップ」於：笠岡市保健センター
- ・2015. 12 「老いと演劇～認知症の人と“いまここ”を楽しむ」講演会 於：倉敷市男女共同参画センター（岡山）
- ・2015. 12 岡山ケア研究会主催「おむつ外し学会 in 岡山」ワークショップ 於：西大寺緑化公園、百花プラザ
- ・2015. 11 「老いと演劇～認知症の人と“いまここ”を楽しむ」講演会 於：児島市民交流センター（岡山）
- ・2015. 10 映画「徘徊～ママリン87歳の夏」スペシャルイベントワークショップ 於：シネマ尾道（岡山）
- ・2015. 10 認知症対応研修会「認知症によりそう演技を学ぶ」講演会 於：瀬戸内市邑久地区、牛窓地区
- ・2015. 9 一般社団法人「おきなわ芸術文化の箱」主催「介護現場に生きる演劇の知恵」講演会
「老いと演劇のワークショップ」於：那覇市職員厚生会館
- ・2015. 9 「老いと演劇のワークショップ」於：和気商工会館（岡山）
- ・2015. 6 岡山県福祉職員生涯研修（新任コース）「老いと演劇のワークショップ」 その他多数

どんなことをするの？

ワークショップとは・・・

一方通行的な知や技術の伝達でなく、参加者が自ら参加・体験し、グループの相互作用の中で何かを学びあったり創り出したりする、双方向的な学びと創造のスタイル。

ワークショップー新しい学びと創造の場 (岩波新書)中野民夫著より

プログラム例

① 遊بریテーション～老いを受け入れるヒントは遊びにある！？～

遊بریテーションとは、認知症の人や障がいを持ったお年寄りに「遊び」を通じてリハビリをしてもらう方法論です。身体を使った遊びは演劇の原点です。「できる」「できない」にこだわらず、「できない」ことすら楽しむ、遊びの価値観を介護現場に持ち込みましょう。



② 認知症の人とのコミュニケーションを考える

～認知症の人の言動を正すのではなく、演技で自然に受け止めよう！～

《認知症の人を囲んで》5人一組で雑談をしてもらい、その中の1人に「認知症の人」役になってもらいます。「認知症の人」には、演劇の台本を渡し、周りが雑談をしているときに好きなタイミングで台本に書かれている台詞を発してもらいます。周りがその脈絡のない言葉に対してどのような態度をとるかによって、認知症の人の気持ちを体感してもらいます。

《イエスアンドゲーム》介護士の食事の声かけに対して、食事に行きたがらず「田植えする」という認知症の人。参加者に「介護士」役と「認知症の人」役を交互に演じてもらい、認知症の人の言動を受け入れるコミュニケーションを体験してもらいます。

こういったシアターゲームを通じて、認知症にはこういった中核症状があり、BPSD(行動心理症状)が生じるメカニズムについて解説します。

③ ショートストーリーをつくる

～介護職員は老人の人生を紐解き、個性を引き出す演出家！～

②の発展形。それぞれ人生にまつわるアンケートに答えて、皆のエピソードをもとに認知症になった「わたし」とその周りの人々が登場する介護現場の1シーンを創作します。



《参考》3年間のプロジェクト概要

OiBokkeShi × 三重県文化会館
「おいと演劇」オイ・ボッケ・シ

「介護を楽しむ」「明るく老いる」アートプロジェクト

三重県文化会館が OiBokkeShi 主宰の菅原直樹さんとタッグを組んだアートプロジェクト。
私たちにとって身近なテーマとなりつつある「介護」と「老い」という2つの視点から、県内各地で3年にわたる事業を展開していきます。

「介護を楽しむ」

1年目は、介護の現場に携わる職員の方々や、専門学校の先生・生徒、認知症の人とそのご家族、また今後の高齢社会を担う子どもたちに向け、講演会や介護に演技を取り入れたワークショップ（体験型講座）を開催。介護する側・される側のより良いコミュニケーションを考えます。2年目以降は、1つの場所でじっくりワークショップを重ね、新しい介護のモデルケースづくりに取り組みます。

「明るく老いる」

1年目は、高齢者向けにそれぞれの人生を振り返りながら、老いをポジティブに捉えるワークショップを開催。2年目以降、ワークショップで出会った仲間とともに、生きがいづくりを目的としたシニア劇団を立ち上げます。稽古を重ね、3年目には三重県文化会館小ホールを老人ホームに見立てた発表公演の実施を目指します。

いずれも医療・介護の両面から専門家を招き、3年間の記録を分析・調査。
それらをレポートとしてまとめ、冊子を発行します。

認知症受け入れ演技

俳優・介護福祉士 菅原直樹さん 都城で体験講座

「介護者は認知症を受け入れ『演技』することが大切」などと菅原さん



「寄り添う接し方大切」

役。しばらく問答が続く。最後は「来ていませんよ。時間がないから食堂に」「いや、来てる」と強い口調で言い合いになった。

一方で患者の言葉を受け入れた演技をすると、自然に「ああ、来てますねえ。孫に出すためにお茶を取りに食堂に行きましょう」と患者を誘導する流れに。菅原さんは「認知症の人は、患者を誘導する流れに。菅原さんは「認知症の人は、

演劇的な手法を用いる。keshi(おいぼつ)とて楽しく認知症患者と関し」を主宰。自身の経験から「認知症の人は(一般と違う)言動や失敗が増える。23、24日、県内2会場であった。県内初開催で、都城それを拒絶するのか「人間市文化振興財団・MAST共同事業体が企画。俳優で介護福祉士の菅原直樹さん(33)岡山県が、介護現場のケースによって演技する。この中で、お互いに気持ちの負担が軽くなる方法を伝えた。

最終日は都市総合文化ホールであり、福祉や演劇関係者ら27人が参加。菅原さんは介護施設で働きながら老いを題材にした演劇を公演する団体「Oibokが来てる」と言い張る患者



演劇を通して認知症患者との関わり方などを学ぶ参加者ら

ない」という思いから徘徊(はいかい)という形で現れる可能性を指摘。患者の自己肯定感や自尊心を大切にしたい関わり方を求めた。

2025年には団塊世代が後期高齢者となるなど、今後も認知症患者は増加が見込まれている。菅原さんは「(患者は)明日はもっと物事が分からなくなるかもしれないし、亡くなるかもしれない。介護する人は(患者と自分の)今を大切に、共に楽しむ気持ちを持ってほしい」と呼び掛けていた。(成田和実)



たときは「孤独を感じた」「むきになった」などと患者の気持ちを察していた。菅原さんは不適切な対応が続くと暴れるなどの問題行動や、「ここにはいたく

夫忘れた妻の介護

「演技」で救われた

希望の現場 —私が変える— ④

「なんぼになったかな？」
昨年12月の朝、岡山市に住む岡田忠雄さん(90)が、自宅ベッドで横になる妻郁子さん(90)に顔を拭くタオルを渡しながら尋ねた。「30歳です」。
郁子さんは認知症だ。
忠雄さんが「ははは。生年月日は？」と笑顔で続けると「大正12年」。「よく覚えてる」とほめると、郁子さんは穏やかな表情になった。

夫妻はともに大正15年生まれの忠雄さんは「以前なら90歳だろ」と言っていた。ケンカになった。でも、今は正さない。だから平気でいられる。亡くなったきょうだいも今も生きていられる。郁子さんに話をあわせる時も、忠雄さんは、それを「演技」と呼ぶ。郁子さんは介護の必要度が最も高い要介護5。夫に子どもはおらず、約40年前に建てた一軒家に2人で暮らす。デイサービスなどを利用する日以外は、忠雄さんが自宅で介護している。

異変は約15年前から。タンは貯金を忠雄さんに盗まれたと疑った。7、8年前から徘徊が始まり、夫を認識できなくなった。「家に帰る」と言う郁子さんに、「ここが家！わしが主人だろ」と怒鳴った。しかし妻は首を振った。ボケババア。殺してやろうかと身がふるへた。長年つける日記に、激しい言葉が目立った。忠雄さんが体を壊して入院することもあり、体力も追いつめられていった。2年半前、ある新聞記事に目をとめた。認知症の人の言動を正さず、「演技」で受け入れることを体験する講座のお知らせ。参加して「大事な考えだ」と思ったが、講師は介護福祉士。「接する時間が限られる仕事だからできるんだ」。家族の介護には通用しない、と思った。



岡田忠雄さん(左)は郁子さんが「30歳」と言っても、笑顔で応じる。補聴器をつけながら、妻の言葉を受け止める＝岡山市南区

だがある夜、郁子さんが「帰る」と言った時、「タクシーを呼ばないか」と電話するふりをしてみた。「じゃあ待つて」。さらに忠雄さんが「弟さんが迎えにくるって」と伝えると落ち着いた。演じても郁子さんの頑固な言動でケンカになる時もあったが、忠雄さんは演技をして話をあわせれば、お互い穏やかに過ごせることを少しずつ実感していった。

「私も郁子もパニックにならなくて済む」。日記から後ろ向きな言葉は消えていった。ただ、夫を忘れてしまったかのような妻を前に、悲しさは残る。「介護は終わりが見えない。つらさを紛らわせるために「演技」は必要。だいたい、救われています」。

言動正すより 相手の世界受け入れて



体験型講座で講師を務める菅原直樹さん＝岡山県倉敷市

認知症の人を介護している家族の気持ち
優しくできない自分に嫌悪感を感じる時がありますか
「いいえ」…102人 (19.3%)
「はい」…426人 (80.7%)

忠雄さんが参加した体験型講座は、当時、岡山県内の特別養護老人ホームで働いていた介護福祉士の菅原直樹さん(33)が開いたものだ。

菅原さんは大卒後、アルバイトをしながら、平田オリザさん主宰の劇団「青年団」などで舞台俳優として活動。結婚を機に介護の求人を見た時、高校時代に一緒に暮らした認知症の祖母を思い出した。「タンスの中に人がいる」。そんな言動を聞いては、どう接すればいいのか迷った。仕事を通じて、あの悩みと向き合おうと思った。

介護施設で働き始めて、演技と認知症介護は似ていると感じた。

菅原さんを「息子」や「夫」と思い込む認知症のお年寄りに話をあわせると、笑顔になった。「言動を正せばストレスを与えてしまう。逆に相手の世界を受け入れて、時には別人になる。これは「演技」だと思った」。

認知症介護では、相手の感情に寄り添うことが大切、とされる。しかし、「介護の専門知識がない人は、どう接すればいいのか、悩むこともある」。「演技」を通じて、接し方をわかりやすく伝えたい。

2年半前から体験型講座を開催。今は岡山県倉敷市の一般社団法人の職員として町づくりに関わりつつ、東京や大阪など各地を回る。介護施設からの依頼も入る。

講座では認知症の人の役や介護者役を演じ、とっぴな言動を受け入れてくれた時、否定された時、それぞれの気持ちを表現してもらった。大半の人が「心地良い」と答える。

菅原さんは言う。「認知症が進んでも、感情は残っている。認知症の人の言葉や行動を演技で受け入れることで、介護する人も穏やかに過ごせることを知ってほしい」。(滝沢 孝)

2017.1.5 (木) 朝日新聞

演劇で認知症支える試み



岡山県和気町で開かれた「老いと演劇のワークショップ」（菅原さん提供）

認知症の改善などに演劇を生かす試みが注目されている。二月、岐阜・可見市文化創造センターであった「世界劇場会議国際フォーラム」で国内の事例が紹介された。想像力と感情を刺激し、人とのつながりを回復する演劇的手法が高齢者のクオリティ・オブ・ライフ（生きることの質）の向上につながっているとの内容が話題を呼んだ。（井上昇治）

「介護と演劇は相性がいい」。そんな視点で実践する岡山県和気町の「老いと演劇『O i Book e Shi（オイ・ボケ・シ）』」の活動はユニークだ。特別養護老人ホームで働く介護福祉士で、東京の劇団「青年団」にも所属する俳優、菅原直樹さん

想像力や感情を刺激

さんが二〇一四年に始めた。八、九十年を生きてきた高齢者が暮らす老人ホームには、さまざまな人生の物語が詰まっている。腰の曲がった

り歩いていくと、人生がにじみ出て、それだけで絵になる存在に圧倒された菅原さんは「お年寄りほどいい俳優はいない」と衝撃を受けた。菅原さんによると、施設に

では、参加者に認知症の人の言動を否定せず、自然に受け止める演技でコミュニケーションを図る体験をしてもらう。「論理や理屈が通用しない認知症の人も感情が残って



高齢者に会話を促す演劇活動療法の様子（前田さん提供）

いる高齢者は介助されるだけでなく、その人なりの役割を求めている。そんなお年寄りとしてみたら介護者の仕事は、演出家に似ている。相手が認知症なら、おかしな言動を直すのではなく、受け入れる演技も必要。その意味で「介護者も、俳優」になったほうがいい」と言い切る。一般向けのワークショップ

地域で老いを考える機会にも

いる。その人が思い描く世界に寄り添うほうがいい」。演劇の最大の特長は、今、その場で起きていることを共に楽しむところ。認知症の人も、それは可能だ。菅原さんはそう考える。昨年には、地元の駅前商店街で老老介護をテーマにした「認知症徘徊演劇」も上演した。実際に認知症の妻を在宅介護する高齢男性らの出演者

る。何かを感じ、話したくなるきっかけを与える手法で、演劇活動療法と名付けた。前田さんとともに活動する同病院統括理事長で医師の藤井昌彦さんによると、感情や意欲に与る大脳辺縁系に良い刺激を与え、安心できる雰囲気をつくと症状の改善につながる。患者の表情や発言などがどう変化したかで表す「情動満足度指数」では、演劇活動療法や、ギター伴奏による合唱などに改善の効果が高かった。リズムカルで、道理にかなった人間的な物語が、認知症の人のリアクションや会話を引き出すきっかけになる。前田さんは「何もしゃべらなかつた人が、よく話し、笑うようになった。自分の存在がここにあり、誰かが自分の話を聴いてくれるという経験がますます、いい刺激になる」と振り返った。

2016.3.19（土）中日新聞

5年前の東日本大震災をきっかけに、岡山県に移住してきた人たちが、岡山に根ざした活動を展開する舞台芸術の担い手がいる。地域に新風を吹き込む表現者のいまを伝える。

「若い、ほけ、死に向き合うことで私たちが得るものもある。例えば認知症になっても感情は残っており、受け入れる演技を周囲がすることで、お年寄りたちとともに豊かな生き方ができる」

備前市畠田の西鶴山公民館で2月下旬に開かれた、認知症と演技をテーマにした講演会。講師の介護福祉士で俳優の菅原直樹(32)と和気町益原の「老いと演劇」Oibokkeshiを立ち上げ、オリジナル作品を発表している。

第1作「よみちにひはくれない」は、死んだ妻を捜して徘徊する認知症男性の物語。主人公の若者は、男性と二階に捜し歩くことで、徘徊行為の根底にある妻への深い愛情に触れていく。第2作「老人ハイスクール」

東日本大震災
5年

移住と表現

舞台芸術の新風

介護福祉士・俳優 菅原直樹さん

=岡山県和気町=

「老いと演劇」独自の作品

は、福祉施設で職員相手に授劇、介護関係者が注目。岡山県業を始める元教諭、段ボールハウスを持ち込む元ホームレスなど個性的なお年寄りが登場。彼らのほけを、職員が演技で受け入れ、シニールな笑いに交えてみせた。



お年寄りほど味のある
個性派俳優はいない

菅原は宇都宮市出身。3人兄弟の末っ子。内気な少年だった。高校演劇部で「引きこもり役」に抜てきされた作品が全国大会2位に輝いた。特別な人が出るものと思っていた演劇のイメージが変わった。

「自分みたいな人でも輝ける場所なんだ。さまざまな個性がそろった面白さはここから」劇作家平田オリザが教えていた桜美林大に進学。卒業後はフリー俳優として腕を磨き、10年に平田主宰の劇団「青年団」に入団した。同時に、結婚して



西鶴山公民館で認知症演技を習得する「コミュニケーション」についてゲームで体験してもらう演劇。「感情を何より大切にしたい」と、いつも笑みを絶やさない



和気町の中心部を舞台に行われた演劇「よみちにひはくれない」の一場面。若者役の菅原(右から2人目)と認知症男性役の岡田(Chico Arami)

感情受け入れる演技

「おかじいは『俳優に定年はない。歩けなくなれば車いすの役、座れなくなれば寝たきりの役、最後は棺桶に入れる』って言う。こんな人ほかにいない。今、この人という幸せを大切にしたい、そう思わせてくれる」

「おかしいは『俳優に定年はない。歩けなくなれば車いすの役、座れなくなれば寝たきりの役、最後は棺桶に入れる』って言う。こんな人ほかにいない。今、この人という幸せを大切にしたい、そう思わせてくれる」

15年、和気町の特養を退職し、赤磐市の小規模多機能ホームで働き始めた菅原。そこでの経験を基に、医療や福祉が協力して地域で高齢者を支え合う「地域包括ケアシステム」をテーマにした第3作目の構想を練る。少しはかみながらアイデアを語っていった。

「次は、在宅介護の現場を舞台に観客が巡るような作品にしたい。ヘルパーや認知症患者ら、いろんな人が参加することで、より豊かな演劇になるはず」(文中敬称略)

2016年3月5日 山陽新聞 朝刊

和気町内の介護福祉士の男性が主宰する市民劇団が、認知症をテーマにした劇の定期公演をJR和気駅前商店街（同町福富）でスタートさせた。行方不明の認知症患者を捜す主

人公と共に、観客も商店街一帯を歩くことで介護者の疑似体験をしてもらう斬新な試み。18日の初演に出掛け、20人の観客と一緒に鑑賞した。
（岸俊行）

商店街で劇 共に歩き鑑賞

認知症テーマ 和気の劇団公演



JR和気駅前の広場を舞台にした冒頭の場面。菅原さん（左端）らの演技をそばで観客が見守る

「よみちに ひはくれない」と題する約80分の劇は、同駅前広場の場面から始まった。劇団主宰者の菅原直樹さん（31）＝同捜し、商店街周辺を数百歩歩

町和気Ⅱが演じる主人公が20年ぶりに帰省し、昔なじみの「じいちゃん」とぼったり再会する設定だ。
「認知症のばあちゃん（妻）が、徘徊して見当たらない」と打ち明けるじいちゃん。「警察に知らせた？」と驚く主人公に、じいちゃんは「ふつが悪いから一人で捜しとる」とぼつり。観客は、2人のやりとりをそばで不安げに見守る。



出演者と一緒に商店街を歩く観客たち

徘徊患者捜す 観客が疑似体験

き回る。道行く人に話し掛けたり、昔の彼女の家で尋ねたり。似た服のお年寄りが橋の上を歩くのを、商店街近くの河原から見つけて駆け寄り、引き返す場面も。
物語が急展開するのは、主人公がその後立ち寄った眼鏡店。店主の男性がばあちゃんをめぐる意外な事実を告げるが、結末は見てからのお楽しみだ。
劇の随所に「二人では24時間見守れない」「介護施設は何百人待ち」といったせりふもあり、「老老介護の厳しい現実が伝わる」と、鑑賞した歯科医山下芳紀さん（49）＝岡山市北区本町。自営業大森誠一さん（64）＝同富吉Ⅱは「街中で劇を見ることで、現実と

虚構の境がぼやける感じが面白い」と上演スタイルに感心した様子。
菅原さんは東京を拠点に活動するプロ劇団に在籍しつつ、東日本大震災を機に和気町に移住。町内の特別養護老人ホームで働きながら、2014年4月、認知症を取り巻く現実を広く伝えたいと、劇団「老いと演劇 Oibok keshi（オイ・ボッケ・シ）」を設立した。
「よみちにⅡ」は、同劇団メンバーで認知症の妻を在宅介護している岡田忠雄さん（88）＝岡山市南区福島Ⅱの実体験などを基に菅原さんが脚本を書いた。商店街の店に興味が持ってもらい、にぎわいづくりにつなげたいとの思いも込めている。劇にはこの2人のほか、商店街の住民3人も出演する。
菅原さんは「場面の内容に沿って、笑ったり真顔になったりしてくれる観客の反応に手応えを感じた。演技のレベルをもっと高めていきたい」と意欲を見せる。

2月15日の次回以降も月1回ペースで公演する計画。鑑賞料一般2千円、中高生千円、小学生以下無料。予約が必要。問い合わせは同劇団（0869②2313）。